

論文題目： アルテ・ポーヴェラ——戦後イタリアにおける芸術・生・政治

申請者： 池野 絢子

論文要旨：

本論の主題は、一九六〇年代末にイタリアで起こった芸術運動「アルテ・ポーヴェラ〔Arte povera〕」とはいかなる現象であったかを明らかにすることである。アルテ・ポーヴェラとは、日本語では「貧しい芸術」を意味し、批評家ジェルマーノ・チェラント（Germano Celant, 1940-）が一九六七年から七一年にかけて組織した約十三名の芸術家たちの緩やかな結びつきを指す。この芸術運動は、現在一般的に、新聞紙や布きれ、木材、鉄、石など、日常的で粗末な素材を好んで未加工のまま用いた芸術であり、完成されたオブジェとしての作品以上に、しばしば作品のコンセプトや制作プロセスを重視した、と説明される。このために、美術史上の流れにおいては、コンセプチュアル・アートやランド・アートと並ぶポスト・ミニマリズムの一潮流として認識されている。

ただし、こうした認識は運動が誕生した当時は自明のものではなかった。アルテ・ポーヴェラはまず、同語反復的な芸術形式を意味するものとして命名されながらも、その後の展開のなかで、「豊かな」社会のなかであえて「貧し」くあろうとする態度として解釈されていくことになる。アルテ・ポーヴェラが誕生する少し前、一九六〇年代初頭のイタリアは、戦後の奇跡的経済成長を経て大量消費社会へと変貌を遂げつつあった。したがって、この芸術運動は、そうした社会の内部で、近代社会に反旗を翻す態度として理解されていたのである。このように、その名称自体が単に形態的な特徴を指し示すだけでなく、ある種の倫理性を有していたという点は、同時代の他の芸術運動に比して、この運動に特異なものであった。したがって本論では、アルテ・ポーヴェラのこうした反近代主義的性格がいかなるものであったのか、そして、どのようにしてそれが見出されていったのかを、この運動の誕生から解散、そして近年の再解釈と歴史化に至るまでの過程のなかに探った。

この運動については、とくに二〇〇〇年以降、世界各地で重要な回顧展が開催され、再評価が進みつつある。本論はこれら最新の研究動向を踏まえつつも、運動の認知度の低さと研究史の浅さに鑑みて、当時の展覧会図録・パンフレット・新聞・芸術雑誌、および個人アーカイブ資料、作家へのインタビューなどの一次資料を広範に用い、まず基礎的な情報を整理分析することを重視した。とはいえ、この運動のすべてを網羅的に論じることは、参加作家の数からしてきわめて困難である。このため、本論では、この運動の全体像とその同時代的な位置づけ、今日的意義を知る上で特に重要と考えられる五つの主題を選択し

た。

第一章「否定の力——芸術、テクノロジー、マスメディア」では、アルテ・ポーヴェラが一九六〇年代のイタリアという特定の時空間において、いかなる芸術的価値として見出され、どのような役割を担ったのかを、主として当時の批評言説の分析を通じて考察した。アルテ・ポーヴェラは、提唱者であるチェラントの言説と切り離して考えることができないが、彼の言説は単発的に生まれたわけではなく、芸術をめぐる当時の言説の網の目のなかで発されたものであった。本論では、同時代のイタリアにおける芸術批評の地平にチェラントのテキストを位置づけ直す作業を通じて、当時のイタリア社会の状況——テクノロジーの発達や消費主義の蔓延がこの運動の背景にあることを指摘した。また、同語反復的な芸術としてのアルテ・ポーヴェラの背景には、社会に氾濫するイメージへの強い忌避感が存在することを明らかにした。

第二章「トリノの地政学」では、運動としてのアルテ・ポーヴェラではなく、芸術家たちによる活動に焦点をあて、彼らの活動がどのように生まれ、展開して行ったのかに注目した。本論では特に、アルテ・ポーヴェラの作家の過半数が活動拠点とした街であるトリノの事例をモデル・ケースとして取り上げ、トリノの芸術家たちが自分たちの位置する環境のもとで何を思考し、どのようにして実践が生まれてきたのかを考察した。そこから、彼らの制作が芸術を生む縁へ運ぶという理念のもと、身近で日常的なモチーフのブリコラージュ的制作に始まり、次第に現実の生活環境を主題とする制作や、都市へと実際に介入する行為へと進んで行ったことを明らかにした。また、トリノ市内に設置されたオルタナティブ・スペース、「デポジット・ダルテ・プレゼンテ（現代芸術の倉庫）」の事例を取り上げ、同時代芸術をより市民に開かれたものにするために開設されたこのスペースに、芸術家たちが実際にどのように関わっていたのかを考察した。

第三章「実践のパラダイム」では、同時代の芸術における転換点——自律的な作品から、行為や概念といった非物質的なものへの移行が、アルテ・ポーヴェラにおいて、制作と批評言説のあいだで、いかに矛盾をはらみながら展開したかを論じた。作品のマテリアル以上に、コンセプトや、制作プロセス、あるいは身体的な行為が重視されるようになる傾向は、同時代の芸術一般に認められる徴候であるが、アルテ・ポーヴェラの場合、それは単なる作品形態の変化であっただけではなく、「もの」としての要素を捨て去ることで、芸術作品の商品化を逃れる唯一の方法として、批評によって要請されていたのである。本章では、そのことを、六八年のヴェネツィア・ビエンナーレのボイコット運動といった、芸術をとりまく社会的状況という背景のもとに考察した。また、この考察を通じて、六〇年代末の芸術の転換に際し、行為や行動といった実践における主体の位置づけが同時代の言説において非常に重要な問題であったことが明らかになった。さらに本論では、そうした

主体の位置づけをめぐる作家と批評家の考え方の差異のうちに、運動としてのアルテ・ポーヴェラにおける亀裂を認めた。

第四章「前衛と古典主義——一九七〇年代の転回」では、一九七〇年代以降、グループとしてのアルテ・ポーヴェラが終焉を迎えたあとの芸術家たちの制作を、共同体の記憶や歴史への関心という観点から考察した。とりわけ七〇年代以降、アルテ・ポーヴェラの一部の作家たちは石膏像を媒体として作品に取り込みはじめる。こうした傾向は、これまでアルテ・ポーヴェラ「以後」の変化であり、ポストモダンの徴候であるとして理解されてきた。本論では、そうした先行研究の見方を踏まえつつも、作家たちの個々の作品分析を通じて、それが単なる「古典回帰」ではなく、近代から断絶した歴史意識を表明していることを読み取った。また、六〇年代の彼らの制作のうちに、同語反復的でありながら、その純粋性を逃れる要素があることから、前衛と古典主義という相反する二つの要素が、アルテ・ポーヴェラという運動のうちにすでに内包されていたと結論づけた。

第五章「更新されるアルテ・ポーヴェラ——一九八〇年代以降の受容」では、一九八〇年代以降の運動の歴史化と再解釈がはらむ諸問題を論じた。アルテ・ポーヴェラは、八〇年代以降、チェラントの監修による回顧展を通じて歴史的芸術運動として認知されることになった。だが、そこにおいて彼らの作品は、彼らが活動していた六〇年代末から七〇年代初頭とは、違った観点から——すなわち、様々な要素を結びつけるハイブリッドな芸術として再評価されていくことになる。第五章では、こうしたアルテ・ポーヴェラの再評価がポストモダンの風潮といかに親和的なものであったかを、作品と作品が設置される場（非ホワイト・キューブの空間）の問題に焦点を当てて論じた。歴史化と再解釈の問題は、先行研究において、これまでほとんど考慮されてこなかった。しかし、昨今、六〇・七〇年代の芸術作品の再制作・再構築が盛んに行われている状況に鑑みて、この芸術の「かつての姿」と「現在の姿」のあいだに差異があったことを明らかにするのは、重要な手続きである。一連の考察から、本論では、アルテ・ポーヴェラの作品は、たとえ再構築が試みられたとしても、ある場所に設置される都度その印象を変えるため、作品経験が常に過去と同じものではありえないというパラドクスが存在することを示した。

以上五つの考察を通じて、本論では、アルテ・ポーヴェラという芸術運動の輪郭を浮かび上がらせることを試みた。

アルテ・ポーヴェラを含む六〇年代末の諸動向は、拡張と多角化を進める今日の現代アートの状況にとってとりわけ重要な歴史的転換点になったことが、しばしば指摘されてきた。しかしながら、同時期に様々な方向へ拡散していった諸潮流は、歴史としては整理されてきていても、個々の実践の内実にはいまだ不明な点が多い。したがって本論は、アルテ・ポーヴェラという一つの局所的な現象の全体像を浮かび上がらせることを通じて、そ

の独自性を明らかにするとともに、美学と政治、芸術実践の主体、芸術作品と場、といった主題系が同時代の芸術全般に通底する「転換」を形づくっている、という事実を浮き彫りにした。